桐鈴凜々

第 92 号
平成 25 年 11 月15日 発 行
発行責任者
社会福祉法人　桐鈴会
理事長　黒岩秩子
南魚沼市浦佐 5142-1
電話　025-780-4118
FAX　025-777-3731
e-mail
suzukake@rose.ocn.ne.jp
http://www17.ocn.ne.jp
/~tourei/

桐鈴会の理念

・終のすみかを目指す
・「迷惑をかけ合える関係」を目指す
～高齢者、しょうがいしゃ、子どもたちが
安心して住める地域を創ろう～

社会福祉法人桐鈴会生みの親
鈴木要吉さん９月28日逝く

桐鈴会理事長　黒岩秩子

鈴木要吉さんとのお別れ

突然この日が来てしまいました。３年前に鈴懸の入居者になられて、「何の心配もない。そしてどこも悪いところはない」といつも平和な笑顔で鈴懸生活を楽しんでおられるように見えていました。今年、夏に入るころから、食欲がだんだんに落ちてどこかおかしいとみんなで思っていたのに、自覚症状がなかったようで、ある日突然倒れて入院ということになってしまったのでした。（享年 92 歳）

９月30日は、ご自宅でお葬式があり、桐鈴会一同野辺の送りに参加し、そこで、私は弔辞を読ませていただいたのでした。

弔辞

鈴木要吉さん、あなたのおかげで桐鈴会は存在します。あなたは、４５０坪の土地と、多額の資金を提供してくださいました。その土地には大きな桐の木が５本あったので、その桐と、鈴木さんの鈴で、桐鈴会と名付けられたのでした。

今から14年前鈴懸ができた時、要吉さんの息子直さんが、職員として働いていてくれました。ダウン症の方特有の人懐こさがあり、入居者や職員のあいだの人気者でした。でも直君は、２年で亡くなってしまいました。要吉さんにとっては、どんなにかつらい想いだったのではないでしょうか？今回その直君が、お父さんを呼んだのでしょうね。

要吉さんは、桐鈴会のヘルパーステーションを使うのでさえ、かなり抵抗があったそうですね。

サンルームでいつものお茶飲み友だちやヘルパーたちと楽しむ故鈴木要吉さん（中央）

まして、鈴懸には、絶対に入らないといっていました。でも、４年前入院して帰ってくるときには、抵抗なく鈴懸のショートに来てくださり、鈴懸の部屋があいたら、入居者になってくださったのでした。ショートの部屋が、鈴木さんのお家と窓からの眺めが同じだからと、お気に入りだったので、ショートの部屋と、要吉さんの部屋を交換して、住んでいただくことになりました。

要吉さんは、カラオケがお好きでした。とてもいい声で、いつも歌ってくださいました。鈴懸のみならず、夢草堂での行事にはいつも参加してくださり、私たちを励ましてくださっていました。月に２回鈴懸の５階で行われているお茶会には、毎回参加してくださって、楽しいお

話を聞かせていただいたりして、人気者でした。

9月19日がそのお茶会だったのですが、参加者皆さんから要吉さんは？と聞かれ、「8月17日に入院された時には、ICUに入られて、その後よくなって個室に移り、更によくなって大部屋に移られたので、もうすぐ退院されるでしょう」と報告したのでした。ところが、その日の夜嘔吐があって、それ以来食物は口からは入らなくなってしまったのでした。それでも、その後意識がはっきりしてきて、お見舞いに行くと冗談を飛ばして、サービスしてくださるのでした。

こんなに早く直さんがお迎えに来られるとは、考えていませんでした。でも要吉さん、障がい者の集う場所「工房とんとん」が出来上がったのを見ていただくことができました。要吉さんのおかげでここまで来ることができました。もうすぐケアホームおひさまができるのをお見せできなかったのが残念でしたが、直さんと二人で、桐鈴会顧問として天国から見守っていてくださいね。よろしくお願いします。

最後に、鈴懸上棟式の時、要吉さんがその喜びを歌に詠まれたものをご披露させていただきます。達筆な筆字で書かれた元の姿を再現させることができないのがとても残念です。

八海の勇様の如く凛々と
鈴懸の家、今柱たつ

平成25年9月30日
桐鈴会理事長
黒岩秩子

9月17日「ケアホームおひさま」めでたく上棟式を行いました！

7月31日に安全祈願祭を済ませ、9月12日に建て方を始めて6日目の上棟となりました。

浦佐認定こども園児を招待して、上棟式を盛り上げていただくとともに、餅ひろいを大いに楽しんでいただきました。

大きな掛け声で大盛り上がり！

「もちまきにいってきたよ」

浦佐認定こども園
そらぐみのこどもたちから

・こうえんのちかくのすずかけのうしろまで、もちまきにいってきたよ。

・2かいのやねのうえからおばさんたちが、ぼくたちの「まけよ、まけよ、まけまけまけよ」のこえで、たくさんのおもちと、あめと、ガムと、おかねをまいてくれたよ。

・ぼくのあたまに、おもちや、おかねがコンコンあたっておもしろかったよ。おおきなおもちをひろったともだちもいて、すごくよろこんでいたよ。

・ぼくはおおきなおもちをひろえなかったけど、しかくいおもちと、おかねもいっぱいひろえてよかったよ。

・ガムもひろってたべたら、からかったよ。おもちはうちにかえってママといっしょにしょうゆをつけてたべたよ。やわらかくてすごくおいしかったよ。

・もちまきとてもたのしかったよ、どんなおうちがたつのかたのしみだよ。できたらちょっとだけけんがくさせてくれるかなあー。またみんなでみにいきたいな。

大きなおもち、とったどォー！

ケアホームおひさま見学会のお知らせ

おかげさまで念願のケアホームが出来上がりました。下記のように見学会を行います。

どなたでもお気軽にお出かけください。

記

○日時　11月23日（土、祝日）
　　午前10時～午後３時

○場所　工房とんとん隣
　　（八色の森公園北側、
　　ケアハウス鈴懸裏）

○施設の概要　定員７名
　　短期入所１名

○問合せ　工房とんとん
　　電話025（780）4150

工房とんとん感謝祭

工房とんとん生活支援員　若井美由紀

工房とんとんは多くのみなさまに支えられ、４月にオープンしてから約半年を迎えることができました。

その感謝を形にしようと10月12日土曜日、感謝祭を開催しました。

ハロウィンの三角帽子のメンバーさんに「とんとん」や「すずカフェ」と合言葉を言うと「お菓子をプレゼント！企画」を行いました。小さいお子様に大好評でした。

１階カフェスペースでは「１００円均一パン販売」、「ワンコイン（５００円）ランチ」を開催しました。１００円のパンはアッという間に完売。ワンコインランチは選べる焼き立てパンとスープ、サラダ、飲み物の飲み放題がついたお得なランチ。大盛況のうちに用意していた75食が完売しました。

２階の「バザー会場」では多くのみなさまの寄付により、衣類や食器などを驚きのプライスで販売しました。おかげさまで２３，０３５円の売り上げを上げることができました。このお金は今後工房とんとんのメンバーさんの備品購入や旅行などで使わせていただきたいと思います。ご協力いただきましたみなさま、大変ありがとうございました。

第１回ということもあり、また、広報活動もあまりできなかったためお客様が来てくださるか不安と緊張でいっぱいでした。しかし、多くのみなさまに足を運んでいただき、工房とんとんを知っていただけていること、励ましの言葉をいただけたことなど本当に心から感謝申し上げます。今後とも地域のみなさまから利用して頂けるようみなさまと一緒に一歩一歩邁進していきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願い致します。

三角帽子でお出迎え！カフェも感謝祭仕様です。

新入居者紹介

ケアハウス鈴懸入居者　庭野　正夫

10月から入居していただきました。

庭野さんは十日町市出身で61歳です。20歳代の若いうちにご両親を亡くされずっと一人暮らしをされていた方で、一昨年の５月に十日町市から、桐鈴会の事業所の一つであるグループホームひまわりに入居され、そこから魚野の家うらさに通所されていました。

グループホームひまわりは昼夜世話人がいないところなので、発熱の時大変な思いをした結果、「24時間人がいる鈴懸に」と提案し、転居していただきました。宜しくお願い致します。

（林　幸英）

鈴懸おはようヘルプ10周年

「10周年の茶会を終えて」

鈴懸おはようヘルプ管理者　森山栄子

平成15年6月、ケアハウス鈴懸2階にヘルパーステーションが開設され、早10年。後に「鈴懸おはようヘルプ」と名付けられ、初代管理者森山（里）、2代目小野寺、3代目佐藤、4代目を現管理者森山（栄）が引き継ぎ、無事？に10年を迎えることが出来ました。これもひとえに御利用者の方、各事業所の方々、桐鈴会のスタッフなど皆々様に支えられながらここまで来られた事と、感謝の気持ちでいっぱいです。

「もうすぐ10年だね。10年の節目に何かイベントしたいね」と2代目小野寺からの提案があり、4代目森山は、2月から管理者を引き継いだばかり…「そうだね…」と人任せのような返事。なんせ新米管理者。想定外の出来事に四苦八苦の毎日。重いお尻が上がらず、少々？遅れての10周年茶会となりました。

10月5日当日、サンルームが喫茶店に、脇の廊下が癒しルームに早変わり。茶会のメインメニューは言い出しっぺ小野寺の手作りケーキ。他にもわらび餅にチヂミ、漬物とヘルパー一同感謝の気持ちを込めすべて手作りで皆様をお迎えしました。お腹が満たされた後はアロマオイルの香りに癒されながら肩のマッサージでリフレッシュしていただきました。さほど大きくもない部屋に60名近い方がお出でになり楽しく10周年を終えることが出来ました。ありがとうございました。特に手作りケーキが好評で一番長く（5年）管理者をした2代目は思い残すことなく？最終任務を終えホッとしたようです。

癒しルームは大好評でした！

挨拶が遅れましたが、今年の2月から管理者を引き継ぎました森山栄子です。訪問介護の経験が浅い私にとっては、難題に直面するたび壁にぶちあたり大変な毎日ですが、御利用者御家族からの温かい言葉やヘルパー一人一人に支えられながら9ヶ月が過ぎました。これからも鈴懸おはようヘルプを盛り立て、次は20周年茶会が開けるよう頑張っていきたいと思っています。これからもご指導よろしくお願い致します。

「鈴懸おはようヘルプ10周年茶会」

元管理者　小野寺栄子

10月5日、サンルームで桐鈴会の入居者の皆様をお招きして、ささやかな茶会を行うことができました。お出でくださった皆様方には、これまで鈴懸おはようヘルプを温かく見守り、ご利用頂き、そして応援して頂きましたこと心より感謝申し上げます。

もう10年経ったのか！感無量です。あっという間でした。

平成15年6月1日、鈴懸ヘルパーステーション、職員4名でスタートしました。後に名称を「鈴懸おはようヘルプ」に改め、利用者さんが増えていくのに併せてヘルパーの人数も、多いときには13名にまでなりました。

より良い事業所を目指してヘルパー一同、力を合わせ和気あいあいと頑張っています。

さて、私は10周年を目前に、3月で私の次男の嫁（水落文枝）と交代でヘルパー職を引退しまして、鈴懸の宿直業務をさせていただいています。あの過激な勤務から解放されて、ゆったりと優雅に老後を楽しんでいます。

最近素敵な協力員を見つけて散歩ボランティアを始めました。浦佐在住の行方みよ子さんです。優しい方です。一人では不安で外出がおっくうな方、動けない方、散歩のお手伝いをしますので、いつでもお声をかけてください。今までヘルパーのサービスではしてはいけなかった事、出来なかった事を、ボランティアで行えたらと思います。私達の出来る範囲で。

これからもおはようヘルプを宜しくお願い致します。

「感動の茶会」

グループホーム桐の花
介護員　関　和香子

鈴懸おはようヘルプ10周年、おめでとうございます。

10月5日の記念茶会では、手作りケーキ、わらび餅、ちぢみに漬物、マッサージコーナーなど、手作りの温かさと感謝の思いがとても伝わってきました。

桐の花入居者の方（以前鈴懸に入居されていた）のことを話したいと思います。

その方は、今年に入り一過性脳梗塞とリュウマチ性多発筋痛症を発症し、8月より食欲が出ず、現在は飲み物は飲めますが、食事は摂られず、発熱が続いています。

当日、記念茶会の参加をぎりぎりまで検討していましたが、「気分転換にいっときでも行ってみようか」と参加すると、嬉しそうな笑顔になりました。

懐かしい場所で、顔見知りのヘルパーに囲まれると、手作りのわらび餅を一皿ペロッと食べ、冷たい水が欲しいと二杯飲まれました。

「食べたい」「おいしい」と自分から食べられ、驚きました。

登録のヘルパー職員が多く、普段はみんなが集まることが少ない中で、計画に合わせ協力する体制を見て、良い刺激を受け、介護面でもまた刺激になりました。来年は私たちのグループホーム桐の花も10周年になります。おはようヘルプのチーム力を見習って、素敵な「おもてなし」が出来ればと思います。

最後になりますが、おはようヘルプ職員の皆様へ。大勢でお邪魔してたくさんご馳走になり、ありがとうございました。何を食べても凄くおいしくいただきました。今度是非、桐の花に訪問ヘルプしてください。

お越しくださった方々、ありがとうございました。

米寿・白寿をお祝いして

◆ケアハウス鈴懸

「米寿の祝い」

ケアハウス鈴懸介護員
岡田としい

和田タマさん、井上信吉さん、青木ヨシノさんが、めでたく米寿を迎えられ9月14日、祝いの食事会が催されました。

昨年度米寿の代表、関薫司さんの乾杯の音頭で宴会開始。膳の上のごちそうに箸も進み、お酒もちょうど良く入ったりして、にぎやかで楽しいひと時を過ごしました。頑張った職員の出し物はどうでしたか？復興支援歌の「花は咲く」の歌のリレー。そしてオラとオメェのアベックの「麦畑」。仮装に凝ってみました。大笑いありがとうございました。

88歳の今日まで『何だ坂こんな坂』をたくさん乗り越えられて益々元気なお三人、本当にご苦労様でした。これからは『ゆるい坂』をゆったりとこの鈴懸でお過ごしください。私ども職員も一生懸命後押しをさせていただきます。

お三人の米寿心よりお祝い申し上げます。

（右上）井上信吉さん
ご夫妻
（右下）和田タマさん
（左）青木ヨシノさん
ご夫妻

「米寿の祝いありがとうございました」

ケアハウス鈴懸入居者
井上信吉

風爽やかな秋晴れの良き日に、米寿のお祝いをしていただきまして、誠にありがとうございました。本来ならば私の子どもたちが、してくれるはずだったのですが、運悪く長男が体調を崩したので、私の米寿祝いは無いものと諦めていたところでした。このたび、鈴懸さんで職員を始め、ヘルパーや入居者の

皆さん全員で盛大なお祝いをしていただき、感謝以外の言葉はありません。さらに数々の品物をいただき、重ねてお礼を申し上げます。

88歳、子どもの頃は身体が弱かった私が、長い年月よくもここまで生きて来たもんだと思いました。戦前、戦中、戦後と、三つの時代をくぐり抜け、貧困の時代から繁栄の時代まで人生いろいろでした。良きことも悪しきこともすべて過去となり、顧みると走馬灯のように浮かんでは消え、消えてはまた浮かんできます。

乱文ではございますが米寿祝いのお礼を申し上げます。そして、今後まだ長いお付き合いになると思いますので、職員の皆さん、入居者の皆さん宜しくお願い申し上げます。

「米寿の祝いに ♪花は咲く♪ リレー唱」

ケアハウス鈴懸介護員 桑原千秋

米寿の会に職員一同で祝意を表そうと、ＮＨＫで放映されている復興支援ソングを歌うことになりました。ガーベラ（花言葉は前進）を一輪携え、リレーの如く歌い繋ぐあの曲。過ぎし日々や巡り合ってきた人々に思いを馳せ、幾度も「花は咲く」と命のリレーを思わせる歌です。岡田実行委員長の号令のもと、早い者勝ちで担当する歌詞を決め（私は加藤茶）練習しました。ダンディーに、可憐に、ブリッコ風にと歌う人の個性が光ります。サッと次の人に交代するのがコツ。その中で只一人、黙して清楚に祈る美女役（鈴木京香）は、理事長が担当。はて、推薦されたのか強力な立候補だったかは定かではありませんが・・・。

迎えた当日、本物の録画も流す隣で、段ボール製のテレビから次々に顔を覗かせて熱唱。衣装も本物に似せ工夫しました。厚かましくも、内心期待していたアンコールの声をいただき全員での大合唱。♪花は♪花は♪花は咲く♪、と笑顔で繋いだのは歌だけではなかった気がして余韻が残りました。米寿万歳！

（言い訳）職員全員での余興は笑いと拍手喝采でしたが、残念ながら全員参加のため写真は撮れませんでした。

◆グループホーム桐の花

「米寿・白寿・敬老のお祝い会」

グループホーム桐の花 介護員 小林登美子

去る9月22日、米寿・白寿・敬老のお祝い会を行いました。当初、16日の敬老の日に行う予定でしたが、台風に伴う諸般の事情で日延べせざるを得ませんでした。

片桐アキコさん米寿、大塚悦子さんと水落ケサさん白寿、おめでとうございます。大きな拍手と共に花束とプレゼントを贈呈させていただきました。

三人とも、赤い頭巾の下の顔が大きくほころび嬉しそうでした。代表で大塚悦子さんから「ああ何だか嬉しい。皆さんからこんなに祝っていただけるなんて、ありがとう。ありがとうございます」との言葉をいただきました。

（右）水落ケサさん
（中）大塚悦子さん
（左）片桐アキコさん

続いて、関勝造さんとお弟子さん達による津軽三味線の合奏数曲、勝造さんの小諸馬子唄独唱（お孫さん二人の鈴の音入り）、最後はおなじみ津軽じょんがら節独奏でしめくくり、にぎやかにお祝いしました。

お弟子さんとともに
（右）阿部静江さん
（中）関勝造さん
（左）田村芳江さん

その後、調理員岡村幸子が腕によりをかけた祝い膳に舌鼓をうち、なごやかなうちに会を終えることができました。

関勝造さんのお孫さん
（右）ひより（妃莉）さん
（左）なごむ（和夢）さん
かわいい応援、ありがとう！

平和への願いを込めて③

ケアハウス鈴懸　山岸トヨ

☆感興（ハムフン）での束の間の人間らしい生活

この町は、38度線まで直線距離で約２５０キロ、日本海側の都市でした。

住んでいた多くの日本人達はすでに逃げ出しており、其の空き家に私達避難者は数家族ずつ配置されて共同生活が始まりました。

９月29日、私達の割り当てられたところは、税務署職員の官舎で、２組の家族の方と同宿でした。間借りですが食糧などの物資は豊富に有り、家を出てから50日余り、無一物の私達は本当に助かりました。

此処で、近所の李さんと言うオモニ（お母さん）が私を見て、母に「病気ではないのか？」「衰弱している様子だから私の家によこさないか」と、言ってくれたそうです。

12歳の私は、肺浸潤で避難直前までベッドに寝ていたのです。２ヶ月近い避難行で、よく生きていたと思うほど痩せ衰えていたそうです。母はオモニのご好意に甘えて李さん宅に私を預けてくれました。

李さんの家は薪炭商で邦人相手の商売をしていたので日本語は話せるし、私と同じ歳のお嬢さんもいて、とても温かい家庭でした。

翌日には早速朝鮮式に髪を結び、チマ・チョゴリに朝鮮靴を履かせてもらい母のところに食べ物を届けさせて下さいました。

外見を朝鮮人に仕立てて置かないと「反日分子」が来た時に困るからです。李さん一家はとても「親日家」で、私の家族だけでなく、毎日、何升かのご飯と味噌汁を作り、避難民の人達に朝ご飯を恵んでおられました。

少しは落ち着けると喜んだのも束の間、それは12月２日の夕方でした。即刻立ち退き、「富評」（フヒョウ）の収容所に移動せよとの達しが出ました。母からの連絡を受けオモニが送って来てくれました。そして、移動先の環境は良くない所だからもう少し預かりたいといってくれたそうです。

母は、やっと元気になった私を助ける為には良い方法だと考えたそうですが、収容所に行けばどんなことになるか、先の見通しもつかないので、ご好意を謝して私を同行したのでした。

別れのときに李さんから頂いた掛布団一枚とコチジャンは、暖房も塩気も無い極寒の、私達家族の収容所生活を支えてくれました。

☆死と背中併せの収容所生活

感興から僅かしか離れていない富評でしたが、12月の日没は早く、無蓋貨車（屋根の無い貨物車で石炭や材木を運ぶもの）から降ろされた時、辺りは暗く寒さと不安で子ども心にも足がすくんだように記憶しています。

入れられた処は、元陸軍の練習場に設置された廠舎でした。

窓ガラスは割れ、床板は剥がされて荒れ放題でした。幸い、私達に与えられた２畳ぐらいの場所には床板が有り、ムシロを１枚もらって敷き、李さんから頂いてきた１枚の布団に母子６人で潜り込み、互いの体温で温め合い寒さをしのぎました。此処には４５００人からの避難民が収容されたのです。

３日程して配給になったのは高粱（コウリャン）の皮付きのままのものが少しでした。

人間の食べ物では有りませんが叩き潰して皮を割り、一握りの高粱に水を３リットルぐらい入れ炊くのですから、お椀の中には数粒の高粱と水ばかりでした。

日増しに迫る寒気と、食糧事情の悪さに死人の数が増え始めました。母と姉も疲労と栄養失調で動けなくなりましたが、医者も薬も無く食糧は相変わらず大豆の油絞め滓など、家畜の飼料のような物ばかりでしたから栄養など取れるはずもありません。

そんな中、母は発疹チブスに、５才の妹が麻疹に罹り、高熱のため喉の渇きを訴えるが、その渇きを癒す一杯の水さえ与える事が出来ずに、小さな妹は短い一生を終えてしまいました。

死に水は、姉がやっとの思いで汲んできた少しの水で小さな唇を濡らしてやりました。昭和21年１月７日の夜でした。（続く）

秩子の部屋
―ケアハウス鈴懸 小倉幸吉さん―

食事が喉を通らなくなって、長岡中央病院を受診した小倉幸吉さん（昭和２年生まれ）は、咽頭がんを宣告されました。先日、娘さんが来られて事務所でいろいろとお話を聞きました。二人の娘さんは、小さい時からお父さんは出稼ぎに出ていたので、ほとんど家族として一緒に暮らしたことがなかったというのです。「元々口数が少ない父ですが、その上一緒にいなかったので、ほとんど父と話し合った記憶がありません」。今、県立塩沢商工高校の事務をしている次女さんです。

そこで、お父さんから見たらどんな人生だったのだろうと聞いてみたくなってお部屋を訪ねました。

―娘さんが「父と話し合ったことがない」と言っているけど―

「そうだ。出稼ぎでいなかったから、娘と話し合った記憶はないな」

―毎月家に帰るということはなかったの？

「田植えと稲刈りに帰っただけだな」

―まあ！　婿に行ってから出稼ぎを続けていたのね。

「いや、婿に行く前から出稼ぎだ。きょうだいが６人で、兄と姉が二人ずつ、弟が一人。兄と姉は皆死んでしまった。弟は、青森に住んでいて、息子は山梨で教員をしている。兄は、戦争に行って１週間で死んでしまった。でもそのことを知ったのは、３年たってからだった。フィリピン近くの島で死んだけど、骨は帰ってこない。位牌が来ただけ。一番上の兄は、戦後シベリアに取られて、５年後に帰ってきた。俺は、中学３年の時、学校で中島飛行機が募集していることを知ったから、そこに入ることにして中学は中退した」

心配ないよ、小倉さん

―中島飛行機は、戦闘機を作っていたのよね。

「そう。だから、終戦の日を３日過ぎてやめて家に帰ってきた。家で農家の手伝いを５年して、兄が帰ってきたから、出稼ぎに出た。中島飛行機の頃が懐かしい。一番いい時代だった」

―給料がよかったの？

「月５円だった。まあいい方だったな。社宅で、３食出たから、５円は丸々小遣いだった。食事が少なかったから、道端で売っているサツマイモを買ったり、友達や先生との手紙のやり取りに使ったり、たまには映画を見に行ったりした」

―どんな映画を見たの？

「生きる」っていうのを覚えている」

―あれは志村喬のね。戦後だったと思うけど。戦争中はみんなは大変だったのでしょう？

「いろいろなところにいったな。愛知県の知多半島、石川県の小松、群馬県の太田。俺の年から、志願して戦争に行けたけど、俺は、中島飛行機にいたから、志願しなかった」

―それで出稼ぎはいつまで行っていたの？

「よく覚えていない。妻が45歳の時亡くなったけど、その後も出稼ぎに行っていた。千葉だよ。日雇いだ。でもその時の年金で今、鈴懸に支払っている。

15歳から18歳までが、中島飛行機、18歳から23歳まで農作業手伝い、23歳から出稼ぎ、27歳で結婚。娘たちが結婚してから、家に帰ってきた。一人暮らしをしているときに、娘たちが鈴懸を見つけてきて誘ってくれた。

―鈴懸に入ってどうだった？

「よかったよ、何でもよかった。小林さんには一番世話になっている」

―森山里子さんは？

「さんざん世話になった」

―小倉さんは畑をしてくれて、その作物のおかげで鈴懸はずいぶん助かったよ。野菜が安く上がった分さしみとかぜいたく品が食卓にのったものね。10年ぐ

らい畑をしてたかな？

「もっとだ。ここに来て14年になる。（畑を）辞めたのは2年前だからな。俺は、鈴懸に一番先に入ったんだ」

―鈴懸に入って親しくなった人がいた？

「藤縄ミヨ子さん、糸魚川から来ていた。そのうち認知症がひどくなって自分の部屋がわからなくなってしまったから、本田病院の施設に行ってしまった」（実は、このことがあって、隣に認知症対応の桐の花を作ったのでした）

―あの時一緒に入った人がもう9人になってしまったね。鈴懸の食事はどうだった？

「自分で作っていたころのほうが好きな味にできてよかった。中央病院に行ったときはヤダったな。治らないって言われてしまった。前にも食道がん、舌がんで2回手術をしている。食べ物がまずくて食欲がない。飲み込むとき痛いから、今は、ミキサー食にしてもらっている」

そんな状態で体力が落ちて、口が渇いて話しづらそうだった。それなのに「おれはしゃべらないほうだから」と言って「孤高の人」で通っている小倉さんが、思いがけずたくさん話してくれてとてもうれしかった。

近くに住んでいる大淵さんと、薬局で知り合って行ったり来たりもしていたけど、今は具合が悪くなったようで、どうなったかわからない、と心配そうでした。

感動を呼んだ全盲の夫妻によるトーク＆コンサート

桐鈴会理事長　黒岩秩子

10月6日(日)午後夢草堂で、期待していたこの行事が行われました。これは、私の次女黒岩海映が提案し実現したものでした。海映からそのいきさつを。

2011年12月、仲間うちで開いた忘年会に、大胡田誠さんが、声楽家である妻の大石亜矢子さんと0歳のこころちゃんを連れてきてくれました。その時亜矢子さんが歌ってくれた自作の歌や、アカペラの「アメイジング・グレイス」に深く感動し、その時から、いつか必ず、魚沼で、夢草堂で、亜矢子さんのコンサートをやりたいと心にきめました。

一人産んだだけでも驚いたのに、1年後にもう一人子どもを産んで、全盲の夫婦が2児の子育てをしている。一体どうやって?! 聞いてみたい話がたくさん頭に浮かびます。そこで二人のお話も聞けるトーク＆コンサートという企画にしてみました。

亜矢子さんのピアノと共に語る大胡田さん。話を聞きながら微笑む亜矢子さん。

浦佐小学校の2年生には、全盲の石田乃彩（のあ）さんがいます。この乃彩さんとご両親にこの夫婦を紹介したいという思いもあっての企画でした。開会にあたって、乃彩さんを紹介しながら前夜の懇親会でご家族3人が感動されていたことを話しました。

その乃彩さんのお母さん、石田なほみさんの感想をまずはご紹介しますね。

亜矢子さん、誠さんのトーク＆コンサートを娘と共にとても楽しみにしておりました。亜矢子さんの素晴らしい歌声に始まり、その暖かな音色に自然と涙があふれてきました。音楽に支えられてきたと語る亜矢子さん、会場も一緒に歌う場面もあり、娘も喜んで歌っていました。自作の曲も5曲も演奏してくださり、中には茶目っ気たっぷりのかわいらしい曲（盲導犬セロシアの声で歌った）もあり、幅広い選曲で聞き入ってしまいました。

難関の司法試験を、苦労を重ね見事に突破し、弁護士として

法廷に立っている誠さん。ハンデを抱えていても諦めず挑戦し続けることで夢がかなうことを教えてもらいました。「ここまで来られたのは、家族や友人、その他限りない人の支えがあったからこそ」と語る誠さん。つらくて諦めようかと思った瞬間があったそうです。お母様に相談すると頑張れでもやめろでもなく、「自分の心が温かいと感じる方を選びなさい」と言われたそうです。この言葉を聞いた時鳥肌が立ちました。世の中にこんなに人の心を一瞬でとらえてしまう言葉があるのかと、とても感動しました。この言葉はいまでも誠さんの生きる指針になっているそうです。

お二人で一緒に演奏している時でした。愛娘のこころちゃんがシッターさんと遊んで外から帰ってきて、ステージの二人の間に入ってきました。手にはお母さんのために摘んできたと思われる花を握りしめて。すぐにでも渡したかっただろうに、それを堪え、コンサートが終わるまでずうっと握りしめていました。その姿がとてもかわいくて、まさにコンサートに花を添える一幕でした。

亜矢子さんの母としての強さ、音楽家としての誇り、そして誠さんのすべてを包み込んでくれる笑顔。その真ん中に愛しい子どもたちがいて、互いに支え合いながら素敵な家庭を築いている様子が、手にとるようにわかりました。

日ごろ、ゆっくりとコンサートを聞きに行くこともほとんどなく、忙しい毎日に追われる日々でしたが、改めて音楽の素晴らしさ、未来への希望、そして素敵な出会いをいただき、そして心が癒されるとても贅沢な時間を過ごさせてもらいました。

娘がお二人を目標にいろいろなことに挑戦し、明るい未来を切り開いていってほしいと強く思いました。

石田なほみ（乃彩さんの母）

（上）盲導犬のセロシアとちゃちゃこころちゃんに守られた亜矢子さんのトーク。

このコンサートの途中で参加した、魚沼市在住の志田梨花子さんが、実は、大石さんの武蔵野音楽大学の同期であるということで、皆さんに紹介して前に出てきていただきました。すると大石さんがマイクで「1年生の時の試験で伴奏してくださって、1年間お世話になったのです」ここで20年ぶりに出会った二人は、抱き合って泣いてしまったのでした。

その後、私はマイクを石田乃彩さんに向けて、「感想は？」すると、立ち上がって「こんなに上手だと思わなかった」と言い、会場に笑いが広がりました。そして「私はこれから頑張ります」と宣言。大きな感動を呼んだコンサートが終わっても、そこここで会話が続いていました。大胡田誠著『全盲の僕が弁護士になった理由』（日経ＢＰ社刊）にお二人の出会いなどが書かれています。

メガネの忘れもの？

夢草堂にずうっと前からあります。おしゃれメガネ風。お心当たりの方はいませんか？

編集後記

黒岩理事長から、中村尚樹『最重度の障害児たちが語りはじめるとき』（草思社）を薦められた。重度障がいをもつ長男が「語り始め」たら！

関わる時間が一番長い自分が、本人の気持ちがわかるような気がして、なるべく「必要」と思える世話を心がけているつもりだが、それが「気持ち」に添っているかどうか。多分かなりの一人よがりになっていると思う。

この本の中には、信じ難いような事実が紹介されている。重度障がいで言葉がない、理解もしていない、と言われる人たちも、長い年月、言葉と思いをためこんでいるという。

表面に見えているのはごく一部でしかなく、その人の全容は予測もできない深みを持っている。見えているほんの一部だけで人間性まで評価されてきた長い年月は取り返せない。

将来、彼らが「語り始める」世の中になったら、いろんな価値観がひっくり返るのだろうな。

（井口美賀）